

多功城主と家臣の子孫との再会

(1727年4月21日)

4月は別れと出会いの季節です。約280年前の上三川の地では、離れ離れになった城主と家臣の子孫が久しぶりの再会を果たしました。

上三川町には、鎌倉時代より戦国時代まで、上三川城と多功城という2つの城があり、宇都宮氏の南方の要衝として活躍しましたが、1597年に宇都宮氏が改易されると、2つの城は廃城となりました。この後、多功城主多功秀朝の子秀綱は、伊予国今治(現在の愛媛県今治市)城主松平定房に仕官し、一方家臣達の多くは、武士の立場を捨て上三川の地に残り、長い間深い絆を結んだ城主と家臣達は別れてしまいました。このように、離れてしまった城主と家臣達ですが、面識のない子孫の代になった130年後の



見性寺にある多功城主多功家累代の墓

1727年になっても、再会が大きな出来事であったことが、残された文書からわかります。

多功城主の子孫多功孫左衛門は、藩主のお供として、4月17日に石橋宿に到着し、早速、多功家の菩提寺である見性寺に香典金を届けました。これを聞いた家臣の子孫たちは、孫左衛門の宿泊場所に代表者を派遣し、久しぶりの対面を果たしました。その後、21日に孫左衛門が帰りに立ち寄る壬

生宿興光寺の近くで、正式な面会が行なわれることとなり、63人の旧家臣の子孫が面会を果たし、この後、多功村に帰った一行は、見性寺で村人全員に酒を振舞い、再会を祝いました。130年たった後も、深い絆で結ばれていることは、現在の私たちにあって、理解できないことかもしれません。しかし、農民となった家臣たちにとって多功城主の子孫は、武士であった誇りを持ち続ける拠り所であったとともに、先祖たちが苦勞をともにした主君への受けつがれた思いがあったのでしよう。

た報俳句

風光るハウス苺の艶増せり 浜野 正男

春雨や傘ゆつくりと遠さかる 大八木喜重郎

花椿朝日宿りて香を放ち 柳田 石村

石仏も嘔出くさまめそうな杉花粉 伊沢 静香

巢立つ雛親のまな差し落つかず 浜野マス子

春の川列なす魚の影早し 阿部 信子

残雪の男体今日は縞ころも 野沢 花枝

園児らの歌に首振るチューリップ 上野キミエ

つんつるの服着て中学卒業す 石崎 節子

老仲間兵役談義日脚伸ぶ 蓬田 四方

